

白道 133



令和2年5月

人の本質

今、世界中で新型コロナウイルスが猛威を振るい、先行きが全く見えない状況です。

このような中で表面化してきたのが、浅ましい、極悪深重な人間の心ではないでしょうか。

未知のウイルスへの恐怖からデマが飛び交い、買い占めがおこり、医療従事者への差別発言など枚挙にいとまがありません。またどこの国の対策は優れているがそれに比べて日本は…などの批判もおおく見受けられます。

私たちが対峙すべきはウイルスであり人間ではないはずですが、現在の状態が長く続くとますます殺伐とした社会になっていくように思います。

こういう時だからこそ、お念仏申して今日も生かされている自分に気づき、感謝したいものです。

常磐井まや



表紙・絵 服部 美法

「花まつり」

花々は、移ろいの中 この日に咲き揃い、
甘い香りでお祝いしている。



目 次

『教行証文類』の世界 第二十一回	栗 原 廣 海	2
仏教語アラカルト⑫	鈴 木 紀 生	6
真慧上人について①	島 義 恵	10
「縁」に生かされて	柏 倉 妙 照	13
第4回 越後の親鸞聖人編	長 澤 ち づ 子	19
十代からのメッセージ 「筆に込める想い」	佐 々 木 彩	26
白道御懇志御礼・編集後記		

顕浄土真实行文類二（八）

高田短期大学名誉教授 栗原 廣海

一、不回向の行

前回、聖人が、称名を「不回向」の行と名づけると言っておられることについて御自釈の文を挙げ、その意味を簡単に考察して稿を閉じました。今回は、この「不回向」についてももう少し詳しく考えてみたいと思います。

前回も言いましたが、この「不回向」は親鸞聖人のオリジナルな法語ではなく、師である法然上人が『選択本願念仏集』のなかで説いておられますので、それによられたものと考えられるのですが、その意味は同じではありません。その違いを考える前に、まず、「回向」の意味について振り返っておきたいと思います。

「『教行証文類』の世界 第九回」のなかです

でに述べましたが、「回向」は、原語（サンスクリット語）は「パリナーマナー」で、「転回する」「変化する」「進む」などを意味します。その漢訳である「回向」は、「回転趣向」の意とされ、「自ら修めた功德を自らの悟りのために、または他者の利益のためにめぐらし、さし向けること」であると一般的には解釈されています。つまり、「回向」は、一般的には仏道を行ずる行者が、自力で行う行のことを意味しています。

二、法然上人の不回向

では法然上人は、この「回向」を否定する「不回向」を、どこでどのように説いておられるのでしょうか。『選択集』には、「正行（読誦・観察・礼拝・称名・讃嘆供養の五正行）」と「雑行（五正行以外のすべての自力諸善）」について、その得失を判別している、いわゆる「二行章」と言われる章があり、このなかで出てくるのです。法然上人が尊崇され、ひとえにその教えによられた善導大師の『観無量寿経疏』「散善義」の、

もし前の正助二行（五正行を二つに分けたもの。正定の業である称名と助業である称名以外の他の四）を修すれば、心つねに「阿弥陀仏に」親近して憶念断えず、名づけて無間となす。もし後の雑行を行ずるは、すなわち心つねに間断す。回向して生ずることを得べしといえども、衆く疎雑の行と名づく。

を引用し、「この文の意を案ずるに、正雑二行につきて五番の相對あり」と述べて、「正行」と「雑行」について五つの得失が示されます。その五つは、一つは親疎對、二つは近遠對、三つは無間有間對、四つは不回向回向對、五つは純雜對で、「不回向」は第四番目に説かれます。

第四に不回向回向對というは、正助二行を修するものは、たとい別に回向を用いざれども自然に往生の業となる。ゆえに『疏』（玄義分）の上の文にいわく、「いまこの『觀經』のなかの十声仏を称するは、すなわ

ち十願十行ありて具足せり。いかんが具足する。〔南無〕というはすなわちこれ歸命、またこれ發願回向の義なり。〔阿弥陀仏〕というはすなわちこれその行なり。この義をもつてのゆえにかならず往生を得」と。以上次に「回向」というは、雑行を修するものは、かならず回向を用いる時に往生の因となる。もし回向を用いざる時には往生の因とならず。ゆえに「回向して生ずることを得べしといえども」というこれなり。

正助二行と言われていますが、より直接には正定の業である称名のことです。称名を修する者は、回向する心が仮になくても、それは往生のための行になるということです。その理由として、善導大師の「六字釈」が述べられます。「南無」は、歸命であり、また、發願回向の義、「阿弥陀仏」は行である。だから「南無阿弥陀仏」の一声の念仏のなかには、願と行とが具わっているということです。つまり、「南無」という言葉に

は、浄土に生まれるという願いを發して回向

するということがすでに含まれている。だから「南無阿弥陀仏」と称えさえすれば、回向を意識しようがしまいが、その称名には、阿弥陀仏に帰依し、浄土に生まれるという願いと、それを実現するための行とが自ずから具わっている。そういうことから、行者にとっての大事とは何かと云えば、回向の思いのあるなしは関係なく、ただただ「南無阿弥陀仏」と念仏することだけである。そのほかに往生するための条件など何もない。そこで、称名念仏は「不回向」の行と言われたのです。

それに対して、雑行の場合は、回向心をもって、つまり浄土に生まれると強く願い、念じながら行をしなければ、それは往生の行とはならないということです。しかし常に願心を途絶えることなく持ち続けることは極めて難しいことをもって、善導大師は「疎雑の行と名づく」と言われしました。

三、親鸞聖人の不回向

法然上人は、「南無阿弥陀仏」にはすでに回向心が具わっているから、行者の称える念仏に回向心は要求されないことをもって、「不回向」の行と断じられたのでした。法然上人は、行者の修する行を問題とし、「不回向」を説かれました。それに対し、親鸞聖人は、

明らかに知んぬ、これ凡聖自力の行に非ず。

ゆえに不回向の行と名づくるなり。大小の聖人、重軽の悪人、みな同じく齊しく選択大宝海に帰して念仏成仏すべし。

と言われ、同じ「不回向」を説かれながら、行者の修する行について「不回向」を言っておられるのではなく、念仏は行者が修する自力の行ではないことをもって「不回向」と言っておられるという点において、両者には大きな相違が見られます。

振り返りますと、聖人は、『教行証文類』「教文類」の冒頭に、

謹で浄土真宗を案ずるに、二種の回向あ

り。一は往相、二は還相なり。往相の回向について真実の教行信証あり。

と言われているのでした。ここで言われる回向は、「自ら修めた功德を自らの悟りのために、または他者の利益のためにめぐらし、さし向けること」、つまり、仏道を行ずる行者が、自力で行う行ではなく、阿弥陀如来が本願力をもって、自らの徳を衆生にふり向け救うはたらきであるとされていきました。それはつまり、行者からすれば、回向は自らの行、つまり自力ではなく、阿弥陀如来の本願の行、すなわち、「他力」であると理解されていたということです。ですから、行者の立場からすれば、回向を否定し、「不回向」と言うほかないわけです。

「信文類」には、「欲生」を釈して、まことにこれ大小・凡聖、定散自力の回向にあらず。ゆえに不回向と名づくるなり。

と言われます。第十八願に誓われている「欲生」は、阿弥陀如来が衆生を浄土に招き、喚び続けて

おられる勅命を疑いなく受け容れ、信順している信心の内容であり、如来より賜った心であって、行者が定善や散善の自力の行によって得た功德を回向して往生を願う自力の欲生心ではないことをもって「不回向」と言っておられるのです。

『正像末法和讃』（第三十八首）に、

真実信心の称名は

弥陀回向の法なれば

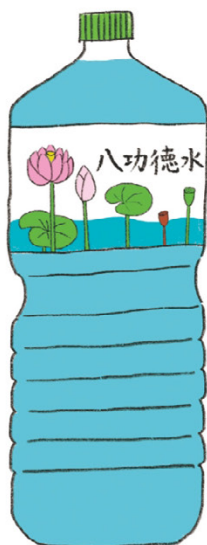
不回向となづけてぞ

自力の称念きらわるる

と詠われ、「不回向」の左訓に、「行者の回向にあらず かるがゆえに不回向という」と註釈されています。行も信も、すべて如来からの賜りもの、すなわち弥陀回向の法であるから、お念仏は、行者の側からすれば「不回向」と言うほかないことを、広く念仏の門徒に知らしめたいと願っておられた聖人の思いが、ことばを和らげた「和讃」というかたちで、端的に語られていると言うことができますと思うのです。

八功德水

八功德水って



どんなお水？

文 浄福寺住職 鈴木紀生

挿絵 青木法子

四三首は

七宝の宝池いさぎよく
しっぽう ほうち

八功德水みちみてり
はつくとくし ちみ

無漏の依果不思議なり
むろ えか ふしぎ

功德蔵に帰命せよ
くとくぞう きみょう

とあります。おおよその意味は

七宝でつくられたお浄土の池は清らかで八つの功德をそなえた水が充滿しています。

この功德は煩惱のけがれがない清浄なお浄土の環境世界で、わたくしたちの思い及ぶところではありません。あらゆる功德を具えておられるお方（阿弥陀仏の別称）に帰命しなさい。

であります。

さて今号は、「八功德水」を取り上げたいと思います。この言葉は浄土三部経にそれぞれ出てきますが、『仏説無量寿経』に

八功德水、湛然として盈満し、清浄香潔にして、味わい甘露のごとし。

『仏説観無量寿經』に

これを、八功德水の相とし、第五觀と名づく。

『仏説阿彌陀經』に

また、舍利弗よ、極樂国土には、七宝の池あり。八功德の水、そのなかに充滿せり。

（『真宗高田派聖典』四六頁・二四頁・一五六頁）

また、坊守様方もよくご存じの七高僧方では、曇鸞大師の『讚阿彌陀仏偈』に

八功德の水池のなかに満てり。色味高潔に

して甘露のごとし。

善導大師の『奉事讚』に

また舍利弗、極樂国土には七宝の池あり。

八功德水そのなかに充滿せり。

同じく『往生礼讚』に

八功如意の水、七宝自然の華、かしこに心

によく係くれば、まさにかならず往くべし。

源信和尚の『往生要集』に

八功德の水、そのなかに充滿し、宝沙映徹

して深く照らさずといふことなし。

（『浄土真宗聖典 七祖篇』本願寺出版社）

一七五頁・五五三頁・六九三頁・八六一頁）

とあります。言うまでもなく宗祖親鸞聖人も『顯

浄土真実教行証文類』に

八功德水、湛燃盈滿せり。清浄香潔にして
味わい甘露のごとし。

（『真宗高田派聖典』三六一頁）

と、『仏説無量寿經』から引用され、更に冒頭に掲げた『讚阿彌陀仏偈和讚』にお示しなされています。

このように、經典に現れた八功德水は高僧方から宗祖へ、さらに今を生きる私たちに連綿と伝えられているのです。

では、八功德水の特質を見てまいりましょう。

『新版 仏教学辞典』（法蔵館）には、甘・冷・軟・軽・清浄・無臭・飲むときに喉をいためない・飲みおわって腹をいためないとあります。

① 甘い水

糖類は生命を維持するエネルギー源として不可欠です。とりわけ脳神経はブドウ糖（ $C_6H_{12}O_6$ ）のみを消費して働いています。

重労働は言うまでもなく、デスクワークや車の運転をしているだけでもお腹が空き、甘いものを欲求するのです。

お浄土の甘い水は、私たちが何かに失敗して心が塞がったときに、阿弥陀様が「そんなに落ち込まなくてもいいよ。一所懸命努力していたら、明るい兆しが見えてくるからね」と、勇気を与えてくださる水だと思います。

② 冷たい水

汗を流した後にかく冷たい水に身も心も癒されます。

けれども、お浄土の冷たい水は、何らかの原因で私たちが瞋恚の炎に包まれたとき、阿弥陀様が「ちよっと立ち止まって反省しなさい。怒り心頭に発しているじゃないか。もっと冷静になりなさいよ」と、厳しく正してくださる水だと思います。

③ 軟らかい水

天然水はカルシウム塩・マグネシウム塩をかなり含有した硬水です。これに対して塩類をほ

とんど含んでいないものを軟水と言い、洗濯や染色に適した水です。

お浄土の軟らかい水は、私たちが人間関係で躓いて心が固まってしまったとき、阿弥陀様が「ちよっと待ちなさい。時間をかけてじっくりと考えていくことが大切です。焦らずに頑張りましょうね」と、固まった心を軟らかに解してくださる水だと思います。

④ 軽い水

水の分子式は H_2O で酸素原子一個と水素原子二個が結合したのですが、水素は普通のものと同重さが約1/16倍の重水素の二種類があり、重水素でつくられた水を重水（重い水）と言います。自然界には重水が0.015%含まれています。重水に対して普通の水を軽水（軽い水）と呼んでいます。

お浄土の軽い水は、私たちが病に倒れて憂鬱になったときに、阿弥陀様が「心配しなくてもいいですよ。治療に専念したら必ず良くなりま

すからね」と、重い心を弾ませてくださる水だ

と思います。

⑤ 清浄な水

今、新型コロナウイルスで世界中が大変です。清浄な空間に身を置くことが勧められています。

お浄土の清浄な水は、私たちがマスクを買い占めて高価で転売しようとしてるとき、阿弥陀様が「何をしようとしているのですか。不正な行為をやめなさい」と、清浄な生き方を教えてください。

⑥ 無臭な水

天魚や岩魚は清流（無臭な水）を好み、決して溝川には棲みません。

お浄土の無臭な水は、私たちが故意にせよ知らず知らずのうちにせよ正当な理由なく分け隔てをするとき、阿弥陀様が「間違っていますよ。よく考えなさい」と、人間の平等性を教えてくださる水だと思います。

⑦ 飲むときに喉をいためない水

劇物が入っていない水を飲んでも喉をいため

ません。

お浄土の飲むときに喉をいためない水は、私たちが相手を傷つける言葉を発したとき、阿弥陀様が「あなたの喉から出る言葉はあなたの心をあらわしていますよ。気を付けましょう」と、美しい言葉の世界を教えてください。

⑧ 飲みおわって腹をいためない水

毒物や細菌が入っていない水は飲み終わっても腹をいためません。

お浄土の飲みおわって腹をいためない水は、私たちが二枚舌を使ったり、意地悪なことをしたとき、阿弥陀様が「人間として大いに恥ずべき行為ですよ。襟を正しなさい」と、腹黒くない生き方を教えてください。

八功德水は、阿弥陀様がいつでも、どこでも、だれにでも届けてくださる尊いメッセージです。謹んで信受してまいりましょう。

合掌

真慧上人について

①

岡崎市 聖洞寺住職 島 義恵

ご本山では、来る令和五年（二〇二三）五月二十一日～二十八日の日程で、本山専修寺特別法要が執り行われることとなりました。

その中で「中興真慧上人五〇〇年忌奉賛法会」も厳修されます。

そこで、今回と次回に渡り、真慧上人について紙面をお借りして書かせていただきます。今回は、真慧上人のご生涯についてお話



真慧上人お木像 専修寺召見殿

させていただきます。

真慧上人の行実、特に青年期までは、高田に伝わる『代々上人聞書』『高田ノ上人代々ノ聞書』『正統伝後集』などに詳しくあり、それ以降は真慧上人の著作物や年次の記された書状などによって窺い知ることができます。

真慧上人は、永享六年（一四三四）に第九世定頭上人の息男として、下野国高田で出生まれになりました。若年の頃、賀波山の麓にあった迎雲寺や高田の周辺にあった天台宗の寺院で勉学を積まれたと言われています。二十六歳の頃には、高田を出て諸国の化導へ向かわれ、江州（滋賀）坂本の妙林院に入り、翌年に伊勢に入って教化を続けて、三十一歳の頃に一身田に入られたと伝わっています。その翌年の寛正六年（一四五六）、真慧上人と高田教団にとって大きな転機となる事件が起こります。それは比叡山延暦寺による本願寺の破却でした（寛正の法難）。

当時の本願寺は、第八世蓮如上人の功績で

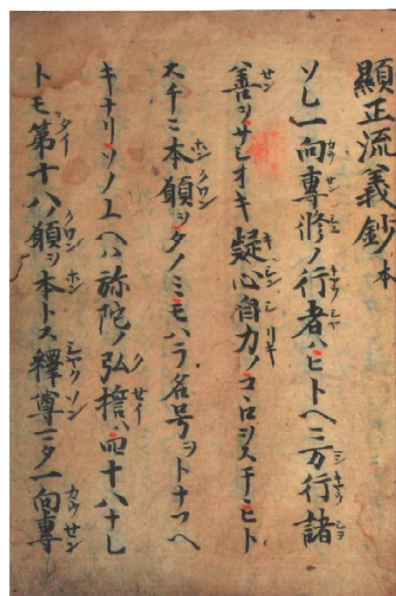
急速に教線を拡大していました。真慧上人と蓮如上人の関係は『代々上人聞書』によると、元々は良好な関係であったようです。しかし、真仏上人、顕智上人が教化したことに始まる、高田派の有力地盤であった三河国の主要寺院が、本願寺に転じてしまったことによって両者の仲に亀裂が入ったとあります。

その様な時に起こったのが、先に挙げた延暦寺による本願寺の破却でした。この事態に危機感を持った真慧上人は、すぐに延暦寺へ使者を送り「無碍光衆」と呼ばれる本願寺と「専修寺門流」である高田派は全く別の教団であると陳述されました。この時、延暦寺から承認を得た証として贈られたのが、如来堂の御本尊であると伝えられています。この事件から、真慧上人は高田と本願寺は別の教団であり、高田こそが親鸞聖人の教えを正統に受け継いでいることを強調して、専修寺門流の地位固めをされています。

その現われが、文明四年（一四七二）

三十九歳の時に著した『顯正流義鈔』です。本書は、蓮如上人ならびに本願寺教団の邪義を批判して、高田の正統性を示したものです。また、長享二年（一四八八）加賀国で一向一揆が起こった時には、守護大名の富樫政親に味方して本願寺教団に対抗されたり、時の幕府や朝廷と関係を深められるなど、専修寺の地位を確かなものにしていけます。

対外的な動きと同時に力を注がれたのが、教団内の統制をはかることでした。明応3年（一四九四）六十一歳に、高田の教えや伝統、

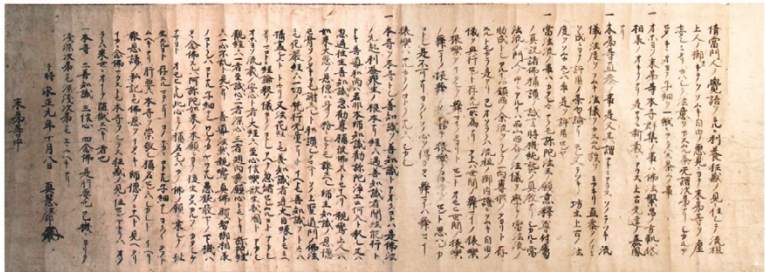


顯正流義鈔 鈴鹿市 西岸寺

葬儀や法名について問答の形で記した『十六問答記』を執筆し、それ以後には名号や本尊などを門弟に与えています。特に真慧上人が考案された、葬儀の際に棺桶に掛ける「野袈裟」は、伊勢国内の多くの念仏道場に下附されています。

永正元年(二五〇四)

七十一歳の時には、高田門弟の心得を記した『御書』『永正規則』を著したのを皮切りに、『御書』を制作されていきます。これら『御書』の多くには、親鸞聖人の教えが守り伝えられてきた本寺は、高田の基盤であり教えの拠り



永正規則 津市浄光寺

所であることを「本寺崇敬」の言葉で示されています。

真慧上人の壮年期以降の歩みは、高田の地位の安泰と派内をまとめる日々であったと思われまます。そして、永正九年(一五一二)七十九歳で往生の素懷を遂げられました。その遺骨は、真慧上人の遺言で親交のあった天台宗の真盛上人が再興された、坂本にある西教寺にも分骨されました。現在も琵琶湖が眼下に広がる西教寺の墓地に、真慧上人のお墓は建っています。

以上のように、真慧上人のご生涯を簡単にですが書かせていただきました。本寺を出でての諸国化導や専修寺門流(高田派)の地位の確立、「野袈裟」「御書」の下附など、現在の高田派の基礎を真慧上人がそのご生涯をかけて作り上げられました。そのご功績をもってして、私たちは「中興上人」とお呼びしているのです。

「縁」に生かされて

福島県 南泉寺住職 柏倉 妙照

今年は八十歳を過ぎた古老の方にとっても未だかつてない暖冬のようにでした。

当地では例年より半月くらい早く堇と福寿草が咲きもう少いで四季桜も、更に当寺名物のしだれ桜も例年よりかなり早く開花しそうです。

平成二十三年四月にこの寺に迎えられ今年四月には早くも十年目になります。

その前年の十二月に菩提寺である南会津町館岩井桁の自源寺に母と年末の挨拶に行った際に先代の坊守さんとの茶飲み話の中で南泉寺の住職が亡くなったことが話題になり、もしかして私の所に後継の話があるかもしれないねと冗談口を語っていました。

大学を卒業後十年程南米で暮らして帰国し、まるで導かれるように生涯の師となる二

人の醍醐寺当山派の僧侶に出会い、在家で仏門に入り働きながら宗派にこだわらず經典と作法を学び昭和から平成へと過ごしました。

その頃まだ健在であった父の親友で当時高田派福島組長であった自源寺先代の徳雄先生（良諦和尚）のところに折々遊びに行っては真宗について教えてもらいました。

その縁もありまた南泉寺代々の家である斎藤家と館岩にあった私の父の本家は故有って親戚としての付き合いがあり、先代妙恵尼僧の夫が亡くなり当寺が一時無住となった時期に徳雄先生から電話があり、南泉寺齋藤家の縁者の方を紹介され有事の際の出仕を依頼され、その年の報恩講の際檀家の方々に紹介されました。

そんなこともすっかり忘れ十五回程過ぎた平成二十二年に当時の住職である妙恵尼僧が亡くなり血族の後継者が無いと判明し、年末の十二月に若松の私の自宅に南泉寺齋藤家縁者の方の推薦が在ったとのことで総代と副代表が来られて住職になることを打診されました。



下：報恩講にて（後ろに見えるのは絵伝）



水子供養聖観世音菩薩

翌年平成二十三年の三月の檀頭会で二十七世住職として承認されましたが三・一一東日本大震災の為交通網はズタズタ、ガソリンは入荷せず檀頭会に出席するためになんとか南泉寺に行った際に除雪機用のガソリンを分けてもらい、そうこうしているうちに東京まで高速バスが運行再開して東海道新幹線と乗り継いでようやく本山にたどり着き、本山専修寺で得度がなりました。

そして四月に南泉寺に着任し実質的に住職の仕事が始まり今日に至ります。

徳雄先生はすでに鬼籍に入って久しいのですが、思い出されるのは平成十年父の葬儀の際若松の斎場で行う為前泊して通夜読経も行つてほしいと願ったところ仏門にあるのだから貴方がやりなさいとのこと、本葬では脇に呼ばれて一緒に誦経するように命じられて後から斎場の方に未だかつてありませんでしたと言われました。

今思えば読経する者の心得を実践で教えて

くださったのでしよう、語意も解らず只一字一句を正確に唱えることを心がけて無心に誦経して葬儀が終わり、母から参列の方々も感動していたと聞かされてホッとしました。

この道に導いてくれた方の一人も昨年亡くなりましたが、亡くなる直前まで經典と作法の解釈や、なにより一人の仏教者としてのありかたについて身をもつての教えを戴きました。

生前より葬儀の際の導師を頼まれ、お弟子さんたちと共に自宅で手作りの葬儀を行うことができ、もう一人の老師の菩提寺である水戸の真宗の大きな古刹に納骨されました。

馬齢を重ねるほど大事な人は去っていきませんが、それ以上に当寺の住職になってからこの方、檀家の皆様とのご縁が深まると共にその縁者の方々を送ることが多くなりました。

坊主の勤め故仕方のないことですが、お世話になった方や縁故者の方など知り合いの葬儀は交誼が深い程切ないものであり、できるだけその人となりを知った上で「法名」や更

に「表白」を記して葬儀に臨んでおりそれが私を南泉寺住職として呼んでくれた檀家の皆さんへの勤めと心得ます。

「表白」つまり「表敬告白」は法会場で仏に対して敬って趣意を述べることであり、葬儀式では故人を極楽浄土への往生を願う願文の意味もある為多くは故人の人生を肯定する文面をしたためます。

私見ですがある意味これは基督教でいう祝福に通じるものがあるのではと理解しています。

また多くの葬儀と法要を通して仏教の基本である三帰依文の意義とそこにある「我執を越えた教え」、いわゆる解脱の本意にこの年になって改めて気づかされました。

難しい話になってしまいました。南泉寺にお世話になって九年、山々は変わりませんが寺を取り巻く環境は大分変わりました。

当寺のある地域は最近よく耳にする限界集落に該当し高齢化と人口減により耕作放棄地が徐々に増えてきており山際にあるこの寺も



地区婦人部奉仕作業

放っておくと草木に埋もれてしまいます。

境内といずれ周辺の農地の管理もするようになるので中古トラクターを購入し、草管理と共に少しずつ農業を始め、ここ数年は荏胡麻を栽培して搾油をして自家用やお使い物に用いています。

とにかく近年はどこの里山も猪、鹿や猿など野生動物が増えて農産物を食い荒らし更に耕作放棄地が増える悪循環になっています。

※不思議に荏胡麻は匂いを嫌うのか獣害が少ないようです。

実際のどこの集落も農地の保全是大きな問題になっており、高齢化と人口減による地域の担い手の不足は地域自治体のそしてお寺の担い手もないことであり、それは人口が減りお金の流通が縮小して市場が小さくなるということでもあり、僻地の末寺にいる者として正にこの国が末端から壊死していくのを目の当たりにするようです。

令和は大変な時代になると危惧しましたがようよう考えれば今も昔も生死が隣り合わせであることは変わりなく、それこそが「法」即ち

「色即是空空即是色」の具現であると思えば今も昔も「生きる」ことは同じでしょう。

社会保障も医療も無くましてや住民サービス等の言葉すら無かった昔は「生きる」という「死」に至る時間の中で日々の勤めや村仕事等日常生活を維持するための労働は否応も無く尽くさねばなかったでしょうし、本質的にはそれは今も同じはずです。

物質的豊かさに惑わされ「死」に対する認識が希薄になり当然表裏一体である「生」の自覚も希薄なっているのが現代人であり、豊かであればあるほど先行きの不安も大きくなり足下の今生きることが疎かになるのかもしれない。

科学が発達して沢山の知識や情報に溢れているのに我々はこの世のことや私達自身のこと何も分かっておらず、法事の席で利いた風なことを話す私も知識として解ったつもりでも何も理解出来ていないことに六十歳を過ぎた今も多々気づかれます。

江戸から戊辰の役を歴て明治に、明治から



平七桜



楼門（県重要文化財）

第一次世界大戦の大正に、大正から第二次世界大戦を経て戦後の昭和に、そして幸にも戦争を経ずして昭和から平成に繋ぎ令和を迎えることができましたが、戦争というリセットが無かった分多様化とグローバルゼーションによる昨今の世の中の急激な変化は驚くばかりです。

間違いなく来る困難な時代に臨んで、開山聖人の時代の太子守宗たいしもりしゅうから真宗高田派の今日迄人々の繋がりと思いいの中で護持されてきたこの南泉寺の法灯を如何にして繋ぐかが私の勤めであり、力むこと無く正面から取り組むことで仏道を成せば幸せと思います。

早朝楼門の鐘を突く前に本堂前の観音像の前で手を合わせますが、月が観音様の頭上にあり、澄んだ空気の深い群青の空に映えてとても綺麗です。

自然の移ろいに「美」が見えた瞬間そこに「生」があることを実感し同時に偶々「生かされている」我が身に気づく、それだけでも「縁」により此処にいる価値があります。

第4回

越後の親鸞聖人編

唯称寺坊守 長澤 ちづ子

坊守研修旅行として、平成二十八年から始まった「親鸞聖人の足跡をたずねる旅」も今回で四回目となります。承元の法難で、聖人は越後（新潟）に流罪となりました。第二回の「流罪の道編」に続き、今回は「流罪地越後の親鸞聖人」というテーマで、二日間、十四ヶ所の聖人ゆかりの地を訪ねました。

新潟市には、聖人が教化のために三年ほど逗留した



鳥屋野逆竹 西方寺旧跡

と伝えられる鳥屋野とやのの草庵跡があります。周辺には「親鸞聖人越後七不思議」といわれる伝承があり観光スポットにもなっています。七不思議の一つ「鳥屋野の逆竹さかたけ」は鳥屋野草庵跡がある真宗大谷派の西方寺

にあります。布教に苦勞された聖人が「吾が弘むるの法 仏意に叶わば 此の枯竹蘇生すべし」と、持っていた竹杖を土に押すと、その杖から根と葉が出て枝が逆さに伸びたという伝承です。境内の竹林を散策すると今でも逆さに伸びる竹の枝を見ることができました。信濃川の対岸にある平野に、「川越名号堂」の鈴木家があります。聖人が信濃川を渡っていると川が荒れだし、「南無阿弥陀仏」のお名号を舳先につけると波は静まり、無事に渡ることができたという伝承です。このお名号は、今も鈴木家の厨子の中に安置されていました。山王神社の神官田代家には「焼き鮎伝説」があります。食事に出された焼鮎を境内の池に入れたところ泳ぎだし、人々は「焼いた鮎でも 親鸞様の 心もらって およいだそうな」といって聖人の恩徳をしのんだと伝えられています。



川越名号堂 鈴木家

昼食は、新潟市内にもどり、北方文化博物館内の古民家食堂みそ蔵で郷土料理を頂きました。ここは、豪農伊藤家の旧宅で、座敷や蔵、庭園などを見ることが出来ます。時間がなく見学できなかったのは残念でしたが、売店には、米どころならではの



八房の梅・数珠掛桜 梅護寺

でしょうか、美味しそうな日本酒が多種並んでいました。

阿賀野市阿賀野川添いの小島という所に聖人は半年間逗留したと伝えられています。ここには、七不思議の伝承が二つある浄土真宗本願寺派の梅護寺ばいごじがあります。聖人が梅干しの種を埋め、念仏のありがたさを説くと、その種から芽が出て八房の実がなったという「小島の八房の梅」の伝承で

す。堤防から一段低いところにお堂があり、閑静な境内に八房の梅の後継木が植えられていました。もう一つの七不思議、花が数珠の房のように下を向いて咲く「小島の珠数



みそ蔵

掛桜」もここにありますが。同じ阿賀野市に「保田の三度栗」の伝承がある真宗大谷派孝順寺があります。現在のお堂と境内は、日本有数の大地主であつた斎藤家の旧宅だつたそうです。ご住職から趣向を凝らした内装の数々を教えて頂き、また、廊下から見る三千坪の庭園は素晴らしく、このようなお寺もあるのだなあと、ただただ感嘆するばかりでした。

鎌倉時代は山岳信仰の盛んな時代でもありました。七不思議の一つ「田上のつなぎ榎」の伝承のある了玄寺は護摩堂山の城主ゆかりの寺です。また、弥彦山は平安時代から神仏習合の山として栄え、弥彦神社周辺には「親鸞聖人清水」跡や「お手植えの椿」「刻み分け親鸞聖人像」など、聖人にかかわる多くの伝承が残っていました。弥彦神社には、聖人の仏像も多数あつたようですが、明治の廃仏毀釈で多くは散逸し

たといわれています。私たちが訪れた真言宗智山派の宝光院は、弥彦神社の林の奥にあり参る人も少ない寂しいたたずまいでした。聖人は他にも修験道の山として名高い妙高山や長野の戸隠山にも度々訪れていたようで、「聖人袈裟掛の松」がある関川天神は長野の県境でした。関川に到着したあたりでもう夕刻となり、あとは宿泊先の赤倉ホテル向かうだけと、ホッとしたのを憶えています。山深い鬱蒼とした道を聖人はコツコツと歩かれ、そして、行く先々で念仏の種を蒔かれた。不明な点が多いといわれる流罪の五年間ですが、「伝承」は聖人が県内広範囲にご教化に励まれた証しであるように思いました。

宿泊地となつた赤倉温泉赤倉ホテルは、スキーのメッカ妙高高原にありました。ロビーには人目を惹く大きな金仏壇がありました。ホテルとお仏壇、なかなか無い組み合わせ

です。夕食の時、ホテルの支配人から、平井ショウさんという先代のおばあさんのお話を聞かせて頂きました。ショウさんは聞法が大好きでそこら中のお寺をお参りして歩いたそうです。ショウさんがお亡くなりになった後、お世話になったご恩返しがしたいと「有縁講」（報恩講）を始められたとのことでした。翌朝、私たちはお仏壇の



赤倉ホテル 大仏壇



居多神社

前で、お朝事をお勤めさせて頂きました。ロビーにお経の声が響き、他のお客様が振り返る場面もありましたが、とはいえ、私たちは「今日も一日頑張って研修しよう!」という気持ちになりました。

二日目、なだらかな稜線を見せる秀峰妙高山に別れを告げ、聖人上陸の地、直江津市に向かいました。

「片葉の葦」の伝承のある居多ヶ浜



ふたつのしぶしぶの宿

神社には、聖人が「末遠く法を守らせ居多の神 弥陀と衆生のあらんかぎり」と歌を詠むと、居多ヶ浜一面の葦が片葉になったと伝えられています。居多神社から高台に登っていくと、天台宗の五智国分寺があります。聖人は越後に着くと国府の代官萩原敏景の預かりとなり、粗末な流人小屋が与えられました。国分寺境内には、最初の住まいとなった竹之内草庵跡、親鸞堂、堂の前には大きな旅姿の親鸞像が立っていました。聖人は、翌年、竹ノ内草庵があまりにも粗末であったため、竹之前草庵に移りました。そこは今、浄土真宗本願寺派の国府別院となっています。ここで聖人は恵信尼公と結婚し、記録では男子が生まれています。境内には、聖人ご一家の生活をしのばせる「柳清水」の遺構がありました。

今は、国道を挟んで海岸側と山側に別

れているように見えるこの地域ですが、
当時は一面の葦原だったそうです。都は
遠く、葦原を吹き分ける海風に押され
て、国府のある小高い丘まで最後の道を
歩かれたことでしょう。粗末な流人小屋
から、四季折々の日本海は見えたでし
うか。聖人と同じところに立ち同じ海を
見つめると、聖人の苦難の人生を思わず
にはいられませんでした。

二日間で十四ヶ所を巡るバスの旅でした
が、三百キロは移動したのではないかと
思います。私たちは、親鸞聖人が生涯に
わたって変らぬ信仰心と布教の情熱を貫い
た、その軌跡をたどらせて頂きました。こ
の感動を忘れず日々お念仏してまいりたい
と思います。このような貴重な旅をご準備
くださいました宗務院の皆様、ご一緒くだ
さいましたお裏方様、坊守の皆さんに、心
より感謝申し上げます。



居多ヶ浜にて記念撮影



「筆に込める想い」

高田高等学校 三年 佐々木 彩

私は幼い頃から祖父と一緒に出かけたり、境内を散歩しながら花や木の名前を教えてもらうなど祖父からの愛情を沢山受けました。

布袍を着ている祖父の姿は凜としていて、いつものにこやかな「優しいおじいちゃん」ではなく、「かっこいいお坊さん」でした。私はそんな祖父の事が大好きでいつまでも「自慢のおじいちゃん」です。

また、私は祖父の書く字がとても好きでした。力強く達筆な祖父の字は私の憧れです。「私もあんな字を書けるようになりたい。」私が習字を習い始めたのは小学校一年生の時でした。習っているうちにだんだん字も上達していき

祖父に書いた書を見せると毎回「上手に書けている。」と褒めてくれました。私は憧れの祖父に褒めてもらえるのが嬉しく、「もっと上手になりたい。」と思いました。しかし、なかなか祖父のような字は書けず、落ち込む時もありました。それでも祖父や家族は「彩の字は力強く綺麗な字だ。」と褒めてくれました。そういった家族の励ましもあり、私は、「自分は祖父のような字は書けなくても、私自身にしか書けない字を書けるようになる。」と思うようになりました。高校に入学した頃に、祖父は私に法名を書いてみないかと勧めてきました。でも、その時私は学校生活や部活動が忙しく、なかなか落着いて字を書く時間がありませんでした。「お寺





の仕事は家を継がない私には関係ない。」そう感じていたのかもしれない。「法名を書いてみよう。」そう決心したのは一昨年祖父が亡くなった時のことでした。「祖父の法名は私が書きた

い。」祖父の勧めをずっと断ってきた私にそんな権利はないかもしれません。祖母はそんな私の思いを察し、心良く承諾してくれました。私が初めて書いた法名はあまり文字のバランスが良いと思えるようなものではありませんでした。しかし、こんな字でも祖父は「上手く書けた。」とあの優しい笑顔で褒めてくれるのでしよう。祖父との思い出を振り返る度、涙があふれて止まりませんでした。私はその時、改めて祖

父の慈愛の深さと偉大さを感じられずにはいられませんでした。

上手な字とは単に綺麗な字のみではないと思います。文字一つ一つに書く人の想いが込められているからこそ、「上手な字」なのではないでしょうか。

(津市 浄光寺)



白道御懇志御礼

[R1・10・21〕R2・4・1〕

10月	松阪市	法性寺	真置	信海	様
大阪府	大乗寺	吉尾美千子	様		
11月	稲沢市	善福寺	麻績	千晶	様
鈴鹿市	宣隆寺	弼	早苗	様	
12月	松阪市	法性寺	真置	信海	様
松阪市	法性寺	真置	信海	様	
1月	鈴鹿市	法林寺	里榮	行子	様
亀山市	願正寺	佐々木節子	様		
津市	圓照寺	久野	景子	様	
松阪市	西方寺	大西	孝子	様	
岡崎市	浄泉寺	戸田	幸子	様	
松阪市	法性寺	真置	信海	様	
四日市市	龍泉寺	龍池とし子	香	様	
大阪府	大乗寺	吉尾美千子	様		

津市	松仙寺	的屋	洋子	様
松阪市	圓浄寺	服部	美津子	様
松阪市	本寛寺	中山	明美	様
津市	常寶寺	藤原	いづみ	様
松阪市	慈光寺	藤山	マミ	様
松阪市	唯称寺	長澤	ちづ子	様
津市	信蓮寺	水平	緑	様
四日市市	善教寺	鷺崎	直栄	様
津市	普賢寺	里見	美智代	様
四日市市	常照寺	藤高	真美子	様
鈴鹿市	大蓮寺	土岐	妙裕	様
津市	見潮寺	西居	順子	様
鈴鹿市	延寿寺	富山	知子	様
鈴鹿市	正法寺	谷口	みどり	様
鈴鹿市	正源寺	加藤	ゆかり	様
鈴鹿市	光明寺	磐城	玉野	様
四日市市	中山寺	松谷	尚子	様
鈴鹿市	養元寺	高島	洋子	様
鈴鹿市	真永寺	橘	久美	様
北海道	専誠寺	増田	悦子	様
四日市市	崇顕寺	丹羽	愛子	様

伊賀市	大仙寺	堤	順子	様
津市	常楽寺	青木	康子	様
四日市市	願誓寺	武内	ミツ	様
津市	深正寺	春日部	眞澄	様
津市	最勝寺	長谷部	規子	様
津市	欣浄寺	菱井	澄子	様
亀山市	誓昌院	梅林	昭美	様
2月			宏美	様
松阪市	法性寺	真置	信海	様
4月				
松阪市	法性寺	真置	信海	様
松阪市	法性寺	真置	信海	様

皆様の御懇志をもとにこの白道を
 発刊させていただいております。
 いつもながらの御懇意に厚く御礼
 を申し上げます。
 これからもどうぞよろしく願い
 致します。

編集後記

季節は春となりましたが、毎日新型コロナウイルスの話題で持ち切りで心ははれない日々です。

2023年の大法会に向けて、そのテーマについて学んでいく企画が始まりました。第一回目は真慧上人についてです。

南泉寺住職の柏倉氏の「令和は大変な時代になると危惧したが、今も昔も生死が隣り合わせであることは変わらない」という言葉は今の状況を見ると大変重く響きます。坊守研修旅行の報告は長澤さんです。『越後七不思議』を巡る研修でした。科学的にはあり得ない、また史実とは見せない伝承ですが、それを家宝、寺宝としてずっと守り伝えてきた人々の親鸞聖人への熱い思いを感じるとともに、民衆にお念仏の教えを説こうと尽力された親鸞聖人が今もいきびいていることを実感した旅でした。

常磐井 まや

白道 133



令和2年5月10日発行

編集 高田派坊守会

代表 常磐井 まや

発行所 津市一身田町2819

真宗高田派本山宗務院内

印刷所 株式会社オリエンタル